

子子の浮きつ沈みつ旅順港 同

萬歳の聲に晴れけり朝の霧 大阪内田 樵夫

夕月や青田万頃水満々 同

三光

人、籠城に宵々淋し虫の聲 陸奥花松 曉星

地、富士の根を迂る夕日や稻の花 仙台立花 一瓢

天、消えかゝる露に香の立つ黄菊哉 東京樂天堂學洋

追加

無一庵奇零

力なき扇の骨や秋暑し

物訪へば吠えつく犬や秋の暮

貸家の庭や秋立つ草の丈

行秋や片足折れしきりくす

夏瘦に男泣かせて罨かな

落城の跡寒げなり秋の風

戦止みし屍の上や月の雁

信州の秋

小林雨峰

(一)

熊ヶ谷の土手の櫻葉大方は枯れて、盡ばみたるが、飄々と亂れ散りぬ。秩父の山を見るに、山の頂は一刷毛さつとはきたるが如く、山の腰より下は深き靄にてぼかさる。天上の雲は霽れんとして霽れず、猶は雨を含み、彼處は白く、此處は灰色に、さては鼠色の濃さを交えて、雲脚ところく繁し。

高崎に來れば、老媪老爺の一群にて、一室は溢れん斗りの人込みとなれり、寸の餘地だもなし。思へば今日は彼岸の中日なり、皺くちやの老婆、

便所に往きけるに、席は早や既に他の人に占められたれば、身の措く處なく、我が友の膝の上に、搦と腰掛け、何知ぬ顔なるも可笑し。我が側らの四十五六の肥てうの年増、これも席なくてわが膝の上を占めて平氣なものなり。而も襟頸のあたり種物の出来て、其の臭氣汗の香と和して鼻につく、行儀のわるきを云はんかたなし。

嗚呼これを善光寺詣での善男善女とす。

瀟車横川につく頃、妙義の嶮嶽、奇峭峻岬、鬼面の如く聳てるを見る。やがて碓氷の隧道に入るなり、われ往年の「寒山落木」の文を想起す。

熊の平に小憩して輕井澤にと着けを、冷風一面の薄を渡りて、さわ／＼として聲あり、これ眞に秋の聲なり。淺間の山目のあたりに峙つ、曾つて藤村が詠せし『寂寥』の歌を誦す。

はるかに洗む雲の外、これは信濃の空高く、今も烈しき火の柱、雨なす石を降しては、み空を焦す灰けぶり、神ゆめさめし天地の、開けそめにし昔より、常世につもる白雪は、今も無間の谷の底、湧きてあふるく紅の、血潮の池を目に見ては、布引にすむはやぶさも、

粟をかへす淺間山、
小諸より地は平らかとなれり。蕎麥の花は畑より畑に山際より山際に、斜に横に白き波紋を描きぬ、玉蜀黍、藜の畑、桑隴稻圃、稀には粟の穂實りて見ゆ。

小諸より山を迎ふるに總てこれ變化多し。遠きもの近きもの離れては去り、切りてまた離る。屋代をすぎて全山皆な一塊の山を爲せるあり、其の

麓をすぎで、榊と云ふあり、姨捨はあれなりと南の方を指す老爺ありき。

水は布引岩の傍を流る、曲々幾變移し、奇狀は恰も大蛇の蜿蜒葡萄ふに似たり、隠れては見え、見えてまた隠る、

篠の井に着きたるとき、左手に西條山、右手に茶臼山を仰ぐ、昔時信越の兩雄、干弋相見えし之地、今僅かに一撮土の荒土を剩すのみ。殘山剩水一片の紀念碑に過ぎざるもうたてし。

稻荷山より瀛車を捨て、棧道を躡る、路危く高し、人車通ぜず、戛々として歩す。突坂を越ゆれば遙かに群山の蓬々として脚下に集まり來るものあり。重疊たる峰巒の背らにまた曲屏の如きもの時つ。更らに登り登りゆげば、四面皆高峰低巒、凸また凹、大なるもの小なるもの、山と山との間

時には稻田の敷物の如きがほの見ゆ、黄なる波を打てり。山腹の茅屋、山麓の炊煙、時に或は巖角に、或は藪陰に、人の住めるあるを見る。住めば都に勝るの味あるなるべし。

日の暮る、頃ひ、棧道を高く低く、深く遠く、幾くねりくりにして、更府村に入る。我友古堂の住る處なり、眺は三方に開け、山色愈奇幻の狀を齎らす。翠影漸く變じて紫色加はり、薄きは次第に濃し、日の暮る、に近きてなるべし。雲は時々飛舞して、簷角を掠む、彼の山と此の山と相對せるものは笑語せるが如し、合せる雲は忽ち別れ、別れて去るものは涙ぐめる處女の如く、離れしもの、合せるは喜を帯べる小兒の如し。崖下を流るゝは犀川なり、鞆鞆として轟き、遠く流れて遠雷の如くに響きぬ。川中島に至りて千曲川に合すと

なり。俯視すれば匹練の如く、山の袂を縫ふてゆ
く、雲煙、川流、峰巒、人家、悉く畫中のもの。

(九月廿三日)

今日久米路橋の奇勝を探るべく出で立つ。

埋れ木はなかむしばむといふれば

久米路の橋は心してゆけ

と『拾遺集』にあるはこれなり、一里あまりの山道
を辿れるなり。檜、榛、くさくさの茂みを分けて
犀川の邊に出づ、兩岸の怪石奇巖、累々相峙ち、
水は競々として巖石を噛む。其の碎くるものは玉
散を散して白は愈白く。其の澄みて淵を爲すも
のは藍を揉みたるが如くに碧愈碧なり。凄絶奇
絶、橋わり兩岸に架す。向ひの岸に着けば一巖高
く聳えて、松蘿之を纏ふ、小亭わり全岸の景勝を
占む。『秋風落木』なる長篇の詩成る、委曲はそれ

に譲れり。

刈萱、釣鐘草、女郎花、萩、桔梗、撫子、鳳仙
花、薊、蓬、野菊、嫁菜の類、其他名も知れぬ、
秋の草花 いひしれぬ香に酔ふて異郷また異郷の
客たるを忘れぬ。(廿五日)

